



に刃をつけている。柄孔は円形ではなく、やや隅丸の方形を呈する。上原分類の狭鎌 IIA5 式に属する。II 類 (3・5) も同じく縦長の長方形の平面だが、下端部に刃をつける。上下に長い舟形の隆起部をもち、柄穴は円形である。上原分類では、広鎌 IIA1 式にあたる。III 類 (6) は全形が不明だが、舟形隆起部の両横に逆三角形の孔をあけ、さらにその横の側縁部には 2 つの小突起をもうける。この逆三角形の孔と小突起は泥除け具を固定するための細工と考えられる。上原分類の広鎌 I 式に該当する。

泥除け具 (4・7) は、文字どおり水気を含んだ土壤に鎌を打ち込む際に、跳ねた泥から手元を守るための補助具で、かつて丸鎌とよばれたものに相当する。4・7 ともに陣笠状の立体的なつくりで、上原分類では泥除 I 式とされている。前述の直柄平鎌に固定するための細工はみられないが、III 類の直柄平鎌に装着されたとおもわれる。

多又鎌 (26・27) は平鎌同様、舟形ないしは円形の隆起部をもち、下端には熊手状に 3 本の細い刃部をつくり出す。上端部は半円形と方形のものがある。

## (2) 弥生 II 期

弥生 II 期 (中期前葉) の直柄鎌は、愛知県清須市の朝日遺跡においてのみ認められる (8～11)。このうち、10・11 は大型方形周溝墓の周溝底面からの出土である。

諸手鎌はこの時期まで残らず、多又鎌も現状での出土例はない。

平鎌では、I 類から隆起部の不明瞭な IV 類 (8) へと移行し、II 類 (9) は弥生 I 期の形態が維持されるが、柄孔は隅丸方形を呈する。なお、この IV 類は上原分類の狭鎌 IIB 式にあたる。この時期、新たに舟形の隆起部が下方に長くのびる V 類が出現する。平面形は縦長の長方形だが、柄孔付近で両側縁がわずかにくびれ、上半部に鋸歯状の細工をほどこす例 (11) もある。

## (3) 弥生 III 期

弥生 III 期 (中期中葉) は朝日遺跡 (12～16・28～30) のほか、納所遺跡、愛知県西尾市岡島遺跡、豊橋市瓜郷遺跡などの出土例がある。

平鎌 IV 類は弥生 II 期以来の幅狭タイプ (13)

に幅広タイプ (12) が加わる。II 類 (14) は残り、V 類 (15) は柄孔の両側縁がゆるやかにくびれ、上端に逆台形の抉りがつく。新たに VI 類として、隆起部は逆水滴状を呈し、柄孔の両側縁が強くくびれるタイプが出現する (16)。このうち、14・15 は大型方形周溝墓の周溝底面から出土している。

この時期、身部の全長が 15cm 以下、最大幅が 10cm 程度で、上端部が丸く、両側縁・下端部ともに刃がつく小型鎌 (28) が出現する。このタイプの鎌は弥生 III～IV 期の伊勢湾周辺地域から静岡県の駿河湾沿岸地域にかけて特徴的に認められる器種である。完形品では、弥生 IV 期の 34 のように、60cm 以上の柄がつく。

29 は木目が身部に対して横方向に走り、平面形が縦方向よりも横方向に長い、いわゆる横鎌である。現在、伊勢湾周辺地域で弥生前期～中期に属する直柄横鎌はこれ 1 例のみである。

30 は多又鎌で、4 本歯で、身部上端は隅丸方形を呈し、柄孔は横長の方形である。

## (4) 弥生 IV 期

弥生 IV 期 (中期後葉) は朝日遺跡 (17～22・31～36) のほか、各地で多数の出土例がある。

平鎌 (17～22)・小型鎌 (31～34)・多又鎌 (35・36) はいずれも弥生 III 期以来の系譜を引き継ぐ。このうち平鎌では、VI 類の出土が各地で特にめだち、未成品も多数出土する。

小型鎌の出土例も多く、朝日遺跡出土の 33 には、両端を折り曲げるタイプの鉄刃を装着した痕跡が認められる。

## (5) 弥生 V 期

弥生 V 期 (後期) は朝日遺跡 (23・24) のほか、愛知県豊田市川原遺跡 (25) の出土例があるが、弥生 IV 期に較べて格段に木製品全般の出土量が極端に減少する。

直柄鎌は平鎌のみで、IV 類 (23)・VI 類 (24) がある。下端の刃部幅が広く、上端部が丸い VII 類 (上原分類の広鎌 IIA3 式) は未成品が川原遺跡で出土しているのみである。

なお、泥除け具もわずかながら、この時期から出土するようになる。

## (6) 弥生終末期～古墳前期前半 (2・3 世紀)

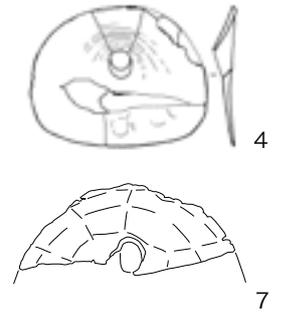
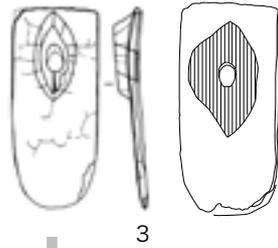
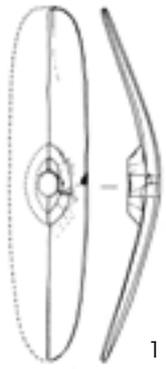
弥生 V 期の貧弱な様相に対し、突如として

直柄諸手鋤

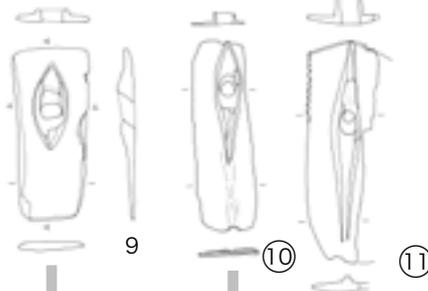
直柄平鋤

泥除け具

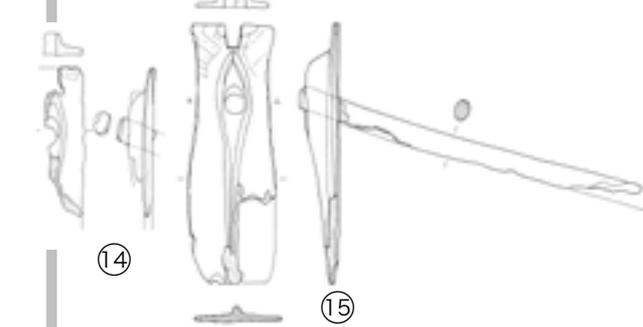
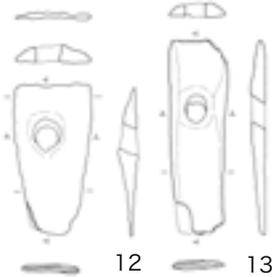
弥生I期



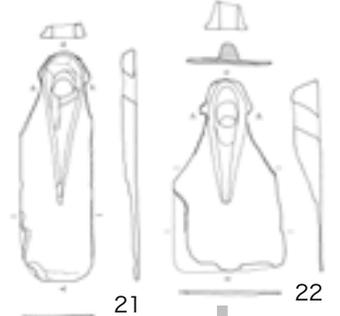
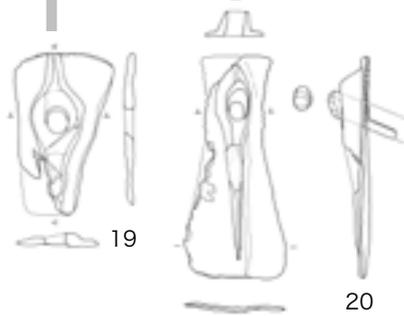
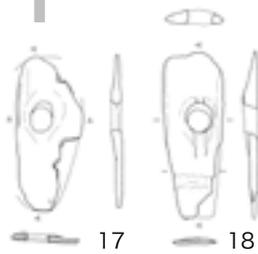
弥生II期



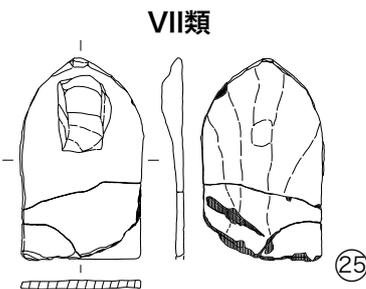
弥生III期



弥生IV期



弥生V期

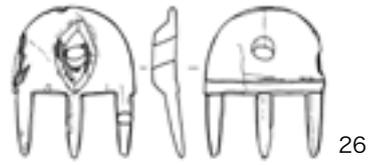


○は墳丘墓および  
その周辺より出土

- 1~4 三重:納所
- 5~7 愛知:松河戸
- 8~24 愛知:朝日
- 25 愛知:川原

図2 直柄鋤編年表-1

直柄多又鍬



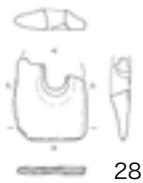
弥生Ⅰ期

弥生Ⅱ期

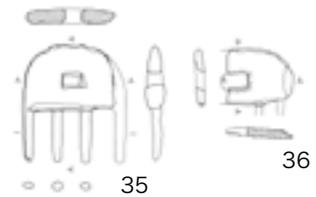
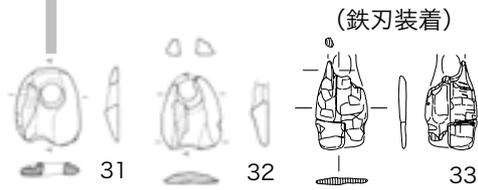
直柄小型鍬

直柄横鍬

弥生Ⅲ期



弥生Ⅳ期



26・27 三重：納所  
28～36 愛知：朝日

1/12 0 60 cm

弥生Ⅴ期

図3 直柄鍬編年表-2

各地で出土例が増加し、活況を呈するようになる(37～47・55～63)。

平鍬では、弥生Ⅲ期以来のⅣ類(37)、Ⅵ類(38・39)が濃尾平野以外の地域に遺存しており、うちⅥ類はこの時期で姿を消す。新たに泥除け具の装着を意図して身の上端部を幅広にし、隆起部とは反対側の面に断面が逆台形の溝(蟻溝)を切る鍬(Ⅷ類-上原分類の広鍬ⅦA3式に相当)が出現する(40～45)。このうち、40～42は平面形・法量に遺跡の単位を超えた広い地域におよぶ強い企画性が認められることから、特にⅧa類として分類する。ただし、隆起部の形態は遺跡ごとにやや異なる。一方、43～45はⅧa類をモデルとしつつ、1点ごとに個性が認められるグループをⅧb類としてまとめておく。

泥除け具は、弥生Ⅰ期とは異なる平面的な作りである(上原分類の泥除Ⅲ式)。平鍬Ⅷ類の蟻溝に対応して、身の上端部に断面が逆台形の突出部(蟻ホゾ)をもうけ、下端部中央付近には装着角度を一定にするために柄と紐で固定するための小孔があく例が多い(47など)。

55～57は、柄の装着角度が105.5～126.0°といずれも鈍角で、木目が身に対して横方向に走る鍬である。しかも身部の下端が柄孔隆起部のある面(使用者側)に強く反り返る形態をもち、刃は下端部ではなく両側縁についている。この種の鍬を上原は横鍬Ⅰ式とし、山田昌久は除草用の鍬として払い鍬と命名した(山田2003)。本稿では山田の名称にしたがう。身の側縁に刃がつくことから、弥生Ⅰ期以来の平鍬Ⅰ・Ⅳ類とおなじ系譜に属する可能性がある。

また、横鍬も久々に現れ(上原分類の横鍬Ⅱ式)、専用の泥除け具(上原分類の泥除Ⅱ式)が装着される(58・59)。さらに横鍬とは別に、下端部に鋸歯状の歯をつけたエブリ(サラエ)も認められる(60・61)。この種のエブリを上原は横鍬Ⅲ式に分類している。このほか、多又鍬も出土している(63)。

さらに特殊な例として、福岡平野を中心とする北部九州地方に特徴的な縦長の方形柄孔を有する鍬が岐阜県大垣市で数例認められる(62)。

この種の鍬はほぼこの時期にのみ、滋賀県湖東地方や北陸地方からも出土していることから、日本海からのルートで伊勢湾周辺地域に流入したと考えられる。

#### (7) 古墳前期後半～中期前半(4世紀～5世紀前半)

前段階に較べて出土量は著しく減少する(48・49・64・65)。

48は平鍬Ⅷa類で、49はその泥除け具。64・65は横鍬で、特に64は泥除け具装着のために、上端部に突起をもうける。柄孔は方形で隆起部をもたない。現状では、岐阜県東濃地方の可児市周辺のみ分布範囲が限定される。

#### (8) 古墳中期後半～後期(5世紀中葉～6世紀)

この時期は直柄鍬の出土量がやや増加する(51～54・66～74)。

51は刃部幅が8.9cmと狭く、身と柄は110.4°と鈍角に装着されている。柄孔周辺の隆起部は逆水滴状でしっかりしており、隆起部とは反対側の面上端に段がつく。通常、隆起部は使用者側とは反対の面につき、かつ身に対して鋭角に柄が装着される場合が多いことから、本例は意識的に逆方向に柄を装着していることがわかる。明確な隆起部や本来ならば使用者側の面上端につく段など、弥生Ⅱ期以来のⅣ類とは異なる特徴や、この時期には珍しい刃部幅の狭い鍬であることから、一応Ⅸ類としておくが、Ⅷa類を再加工しての転用品である可能性が高い。なお、上原分類では狭鍬ⅡA3式に相当する。52はⅧa類の未成品で、二連の連続成形段階のものである。50は上原分類では広鍬ⅦA3式で、筆者の分類ではⅧb類にあたる。

53は弥生Ⅰ期以来の直柄平鍬とは全く異なる系譜として、この時期新たに登場する直柄鍬である。身の上半部は截頭三角形で、下半部にはU字形の鉄刃が装着される。柄孔は縦長の長方形で、54の柄がつく。柄孔の周囲に隆起部をもたず、側面形は真っ平らである。これは、近世のいわゆる風呂鍬の原形にあたるもので、ここでは直柄風呂鍬とよんでおく。

66・67は横鍬で68はその泥除け具。70・71は下端部が鋸歯状になるエブリで、72・73は下端部が平らなエブリである。柄孔は横長の

直柄平鍬

泥除け具

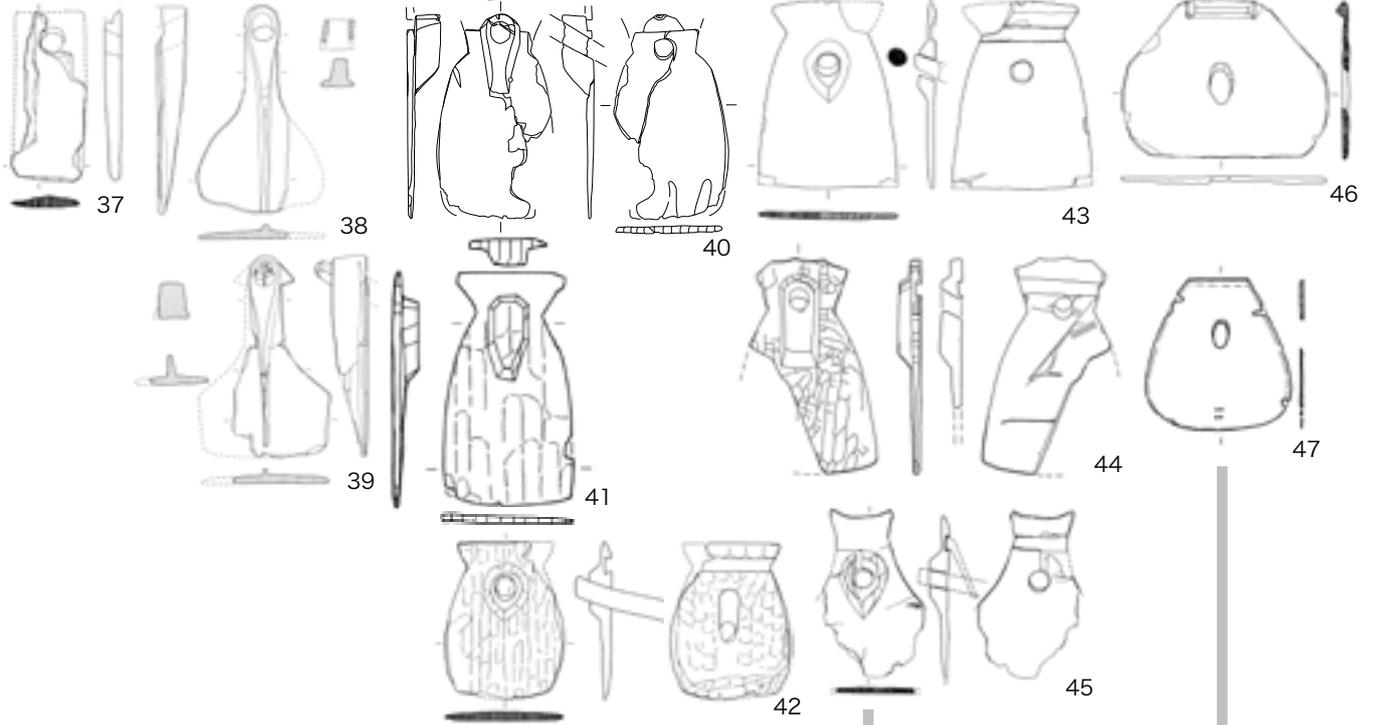
弥生終末期～古墳前期前半（二・三世紀）

IV類

VI類

VIII a類

VIII b類



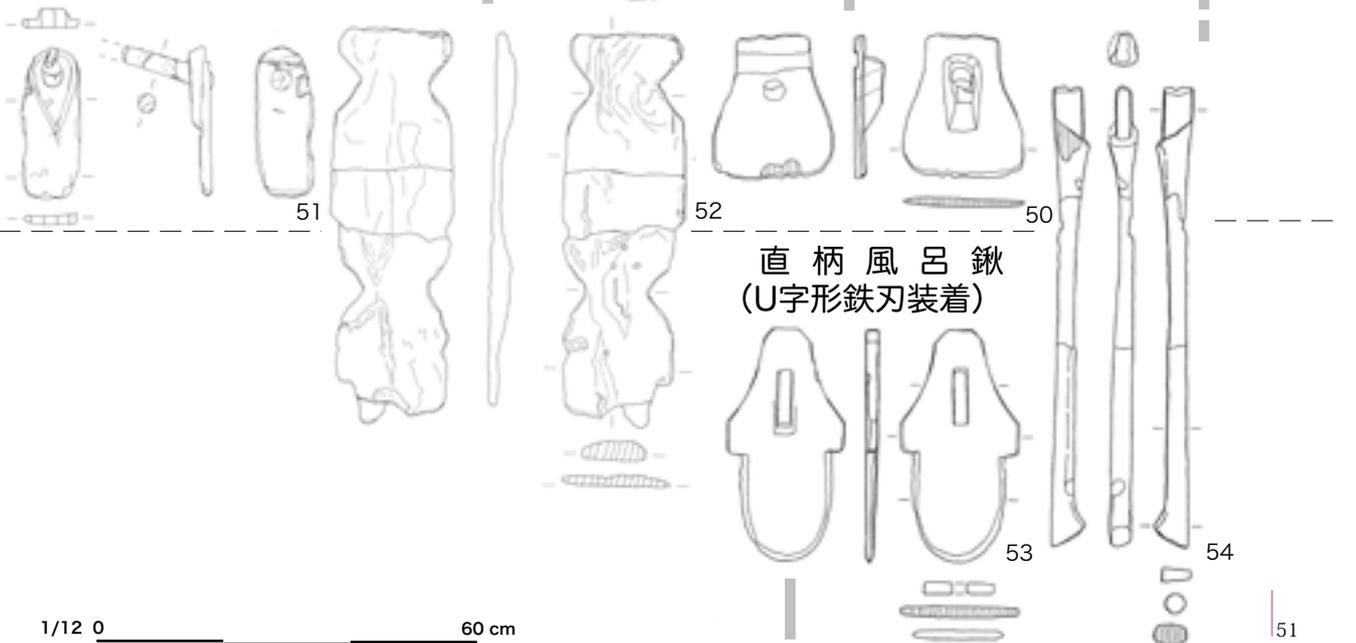
古墳前期後半～五世紀前葉  
（四世紀～五世紀前葉）

37・42・43・45・46 三重：六大A  
40 愛知：八王子  
51・52 愛知：勝川  
41・47 岐阜：荒尾南  
44・48～50・53・54 岐阜：柿田  
38・39 静岡：角江



IX類（VIII a類からの再加工？）

古墳中期後半～六世紀  
（五世紀中葉～六世紀）



直柄風呂鍬  
（U字形鉄刃装着）

1/12 0 60 cm

51

図4 直柄鍬編年表-3

直柄払い鍬



55



56



57

エブリ・サラエ

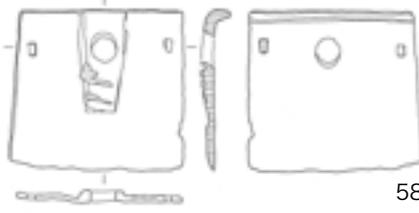


60

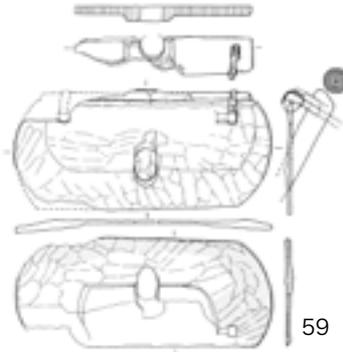


61

直柄横鍬  
泥除け具

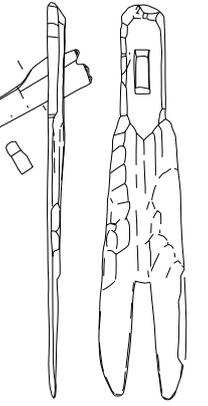


58



59

北部九州型  
直柄二又鍬



62

直柄多又鍬



63

弥生終末期～古墳前期前半（二・三世紀）

古墳前期後半～五世紀前葉  
（四世紀～五世紀前葉）

古墳中期後半～六世紀  
（五世紀中葉後半～六世紀）

55～57・59～61・66・70・74 三重：六大A  
67・68・71 三重：河田宮ノ北  
62 岐阜：荒尾南  
64・65 岐阜：顔戸南  
58 岐阜：柿田  
63 静岡：角江  
69・72・73 静岡：山ノ花



64



65



70



71



72



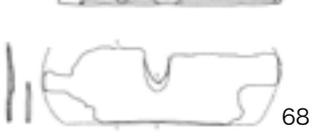
73



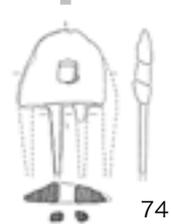
66



67



68



74

変形諸手鍬



69

1/12 0 60 cm

図6 曲柄鍬編年表-1

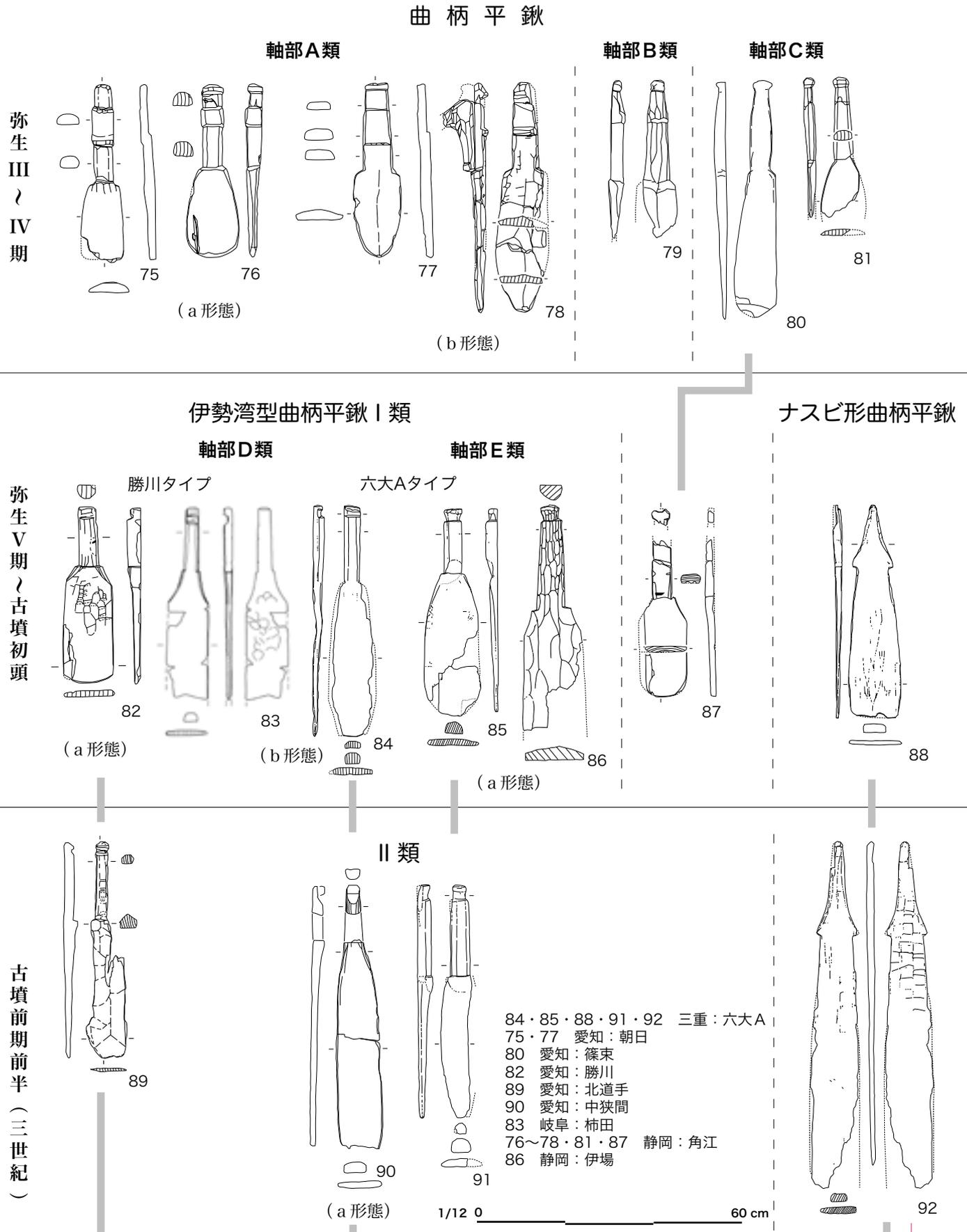


図7 曲柄鍬編年表-2

長方形。74は多又鋏である。

69は、長手方向の両端が柄孔周囲の隆起部がある面にむかって反る鋏で、一見、弥生Ⅰ期の諸手鋏に似ている。ただし、隆起部の形状は図面上の下にむかう逆水滴状で、下端部中央に三角形の抉りが入る。左右両端は欠損しているが、完形品のなかには片側にのみU字形の鉄刃を装着する細工をもつものがあることから、図面上の縦方向にも横方向にももちいられる多目的な鋏である。関東以北に多く分布しており、この地域では静岡県西遠江地方がその分布圏の西端に位置する。必ずしも適当な名称ではないが、黒崎直の命名(黒崎1996)にしたがって変形諸手鋏とよんでおく。

### 3 曲柄鋏の編年的位置づけ

曲柄鋏に関しては、筆者が1989年以降、たびたびその分類案と変遷案を示してきた(樋上1989ほか)ため、本稿での詳述はひかえ、概略のみ記す。

まず器種として(曲柄)平鋏・二又鋏・多又鋏が存在する(図6～8)。この地域では弥生Ⅲ期に出現し、弥生Ⅴ期には伊勢湾型(東海系)曲柄鋏とよばれる独特の形態を生み出して、弥生終末期から古墳中期前半には近畿地方以東の地域に広く分布するようになる。

一方、西日本では弥生Ⅲ期頃、岡山県の吉備地方でナスビを縦割りにしたような形状をもつ曲柄鋏(ナスビ形曲柄鋏)が創出され、弥生終末期に大阪府の河内平野に定着する。さらに古墳前期には東海系曲柄鋏と拮抗して全国に伝播する。

この地域では、伊勢湾型曲柄鋏に2つのタイプが存在し、愛知県尾張地方に特徴的なものを勝川タイプ(82・83)、三重県伊勢地方に特徴的なものを六大Aタイプ(84・85)とよぶ。弥生終末期には奈良盆地周辺から六大Aタイプが、古墳前期前半には北関東(群馬県)から勝川タイプが多く出土する。また、愛知県西三河地方では両者とも在地で製作されている。伊勢地方では、いち早くナスビ形曲柄鋏が流入するが、伊勢湾型曲柄鋏も根強く残る。

古墳前期後半(4世紀)には岐阜県西濃地方

にナスビ形曲柄鋏が流入し、中期前半(5世紀前葉)には尾張・三河地方を飛び越して西遠江地方へと分布圏を拡大する。

古墳中期後半(5世紀中葉)頃、このナスビ形曲柄平鋏にU字形の鉄刃を装着することによって、この地域の伊勢湾型曲柄鋏が一掃され、尾張・三河地方にもナスビ形曲柄鋏が定着するようになる。

柄との対応関係では、古墳前期後半以降、ナスビ形曲柄鋏には反柄がつくことがわかっており、伊勢湾型曲柄鋏および古墳前期前半以前のナスビ形曲柄鋏には膝柄がともなう。

## 4 曲柄鋏の刃部幅および柄の装着角度の検討

### (1) 曲柄平鋏の刃部幅

まず、曲柄平鋏の刃部幅を検討する(図9)。

弥生Ⅳ期および古墳初頭は10～12cmをピークとする正規分布を示す。ただし全体的には、弥生Ⅳ期は10cm未満に、古墳初頭は12cm以上にシフトしており、静岡県浜松市の角江遺跡では20cmを超える刃部幅の平鋏がある。

古墳前期には、伊勢湾型のピークが8～10cmとより狭い刃部幅に移行するのに対して、ナスビ形は14～16cmと逆に幅広化傾向を示す。

古墳中期以降は12～14cmをピークとする分布になるが、鉄刃を装着しないナスビ形の刃部幅が7.3cm～17.5cmと著しくバラつくのに対し、鉄刃装着のナスビ形は12～14cmと16～18cmの2つの山をもつ分布域を示す。

上原による近畿地方の例と比較すると、平鋏C(非ナスビ形)は10cmと12cmあたりにピークをもつ点や、鉄刃装着のナスビ形(平鋏D)の刃部幅が14cmあたりにピークがくることなど、共通点が多い(cf.1)。特にU字形の鉄刃は製作地が限られる規格品であることから、鉄刃のサイズにあわせて身部(風呂部)がつくられた可能性が高い。

### (2) 曲柄二又鋏の刃部幅

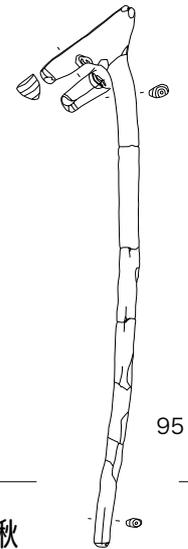
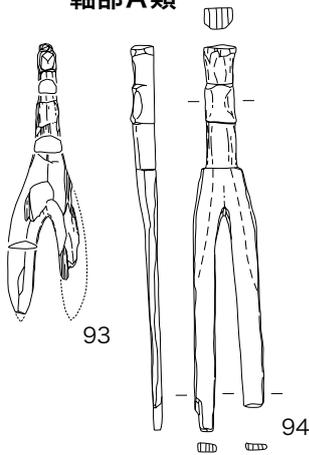
曲柄二又鋏では、弥生中期以降、伊勢湾型Ⅰ類・ナスビ形(古墳初頭～前期)へと、刃部幅

曲柄二又鍬

鍬膝柄

弥生 III ~ IV 期

軸部 A 類



伊勢湾型曲柄二又鍬 I 類

ナスビ形曲柄二又鍬

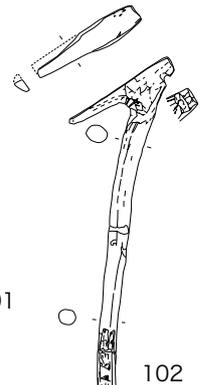
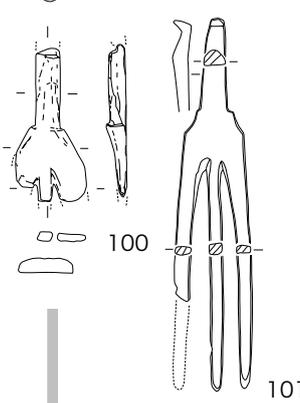
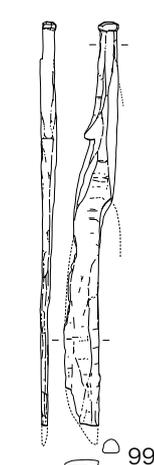
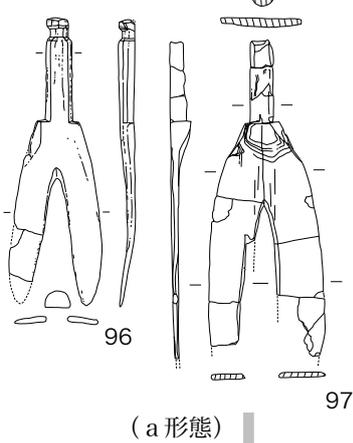
伊勢湾型曲柄三又鍬

弥生 V 期 ~ 古墳初頭

軸部 E 類

軸部 D 類

軸部 D 類

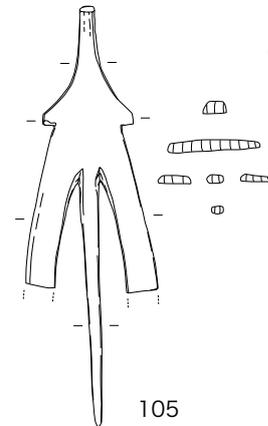
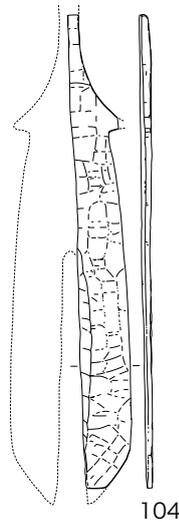
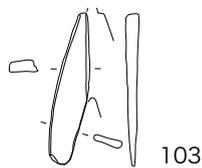


(a 形態)

(b 形態)

ナスビ形曲柄三又鍬

古墳前期前半 (三世紀)



- 93 三重：納所
- 96・99・104 三重：六大A
- 94・97 愛知：勝川
- 100 愛知：八王子
- 102 愛知：朝日
- 103 愛知：中狭間
- 105 岐阜：荒尾南
- 95・98 静岡：角江
- 101 静岡：岡の平

1/12 0

60 cm

図 8 曲柄鍬編年表 -3

の拡大化傾向が認められる(図10)。ただし、古墳中期のナスビ形は、前段階に対して刃部幅が狭くなる。

大まかな傾向としては、近畿地方のデータともほぼ共通する(cf.2)。

### (3) 柄の装着角度

柄(膝柄・反柄)の装着角度は50～55°をピークとする正規分布を示す(図11)。そのなかで、弥生IV期は52.2°～72.7°と角度がやや緩やかな方にシフトしている。

## 5 直柄鍬の刃部幅および柄の装着角度の検討

### (1) 直柄平鍬・横鍬未成品の刃部幅

本稿では、ここまで完成品についてのみ、形態分類と変遷案を提示してきたが、ここではじめて当地域の直柄平鍬・横鍬未成品の刃部幅を確認しておく(図12)。全時期を通じて19～22cmをピークとする正規分布を示す。時期別にみると、弥生I～III期は22～25cmにピークがある。最も未成品が多い弥生IV期は19～22cmに集中する一方で、分布域は9.8cmから29.4cmと裾野も広い。それに対し、古墳初頭以降は16.5cmから27.2cmと分布域がかなり狭まる。

19～22cmのピークは近畿地方の直柄平鍬未成品の刃部幅も同様である(cf.3)。ただし直柄横鍬では、近畿地方が31～34cmをピークとする正規分布を示すのに対し、当地域では完成品が17.9～40.5cmとバラつき、未成品も30.0～45.8cmとかなりの幅がある。

### (2) 伊勢・濃尾平野の直柄鍬(弥生I～V期)

直柄平鍬に関しては資料数が多いことから、時期と地域を限定して検討を試みる(図13～15)。

まず、伊勢～濃尾平野(納所・朝日遺跡)の弥生I～V期では、刃部幅は6.6cm(8)から17.3cm(22)と、かなりの幅がある。柄孔の角度も46.3°(19)から74.7°(8・15)までバラつく。この範囲を示したのが図13の破線である。さらに同時期・地域(遺跡)の直柄平鍬未成品の刃部幅に完成品の柄孔の角度をあてはめたのがグレーのトーンをかけた範囲であ

る。未成品の刃部幅は9.8～27.6cmで、この幅から完成品の幅まで製作過程あるいは使用段階で削り込まれたことになる。

本稿ではここまで直柄平鍬について、特に刃部幅によって広鍬と狭鍬に分けることなく分類・変遷案を示してきた。これまでの出土木製農耕具(掘削具)の研究では、おおむね広鍬と狭鍬は刃部幅15cmを境として分けられてきた(黒崎1970・根木1976・上原1993など)。ここでその分類を適合させると、完成品で広鍬の領域には朝日遺跡の弥生IV期に属する2点(20・22)がかろうじて入るのみで、他はすべて狭鍬の領域となる。

ではここに、民具学の分野でよくもちいられる鍬の機能分類である打ち鍬・引き鍬(打引き鍬)の領域を重ねてみる。打ち鍬(土壌の反転・耕起用の鍬)の領域は一般に刃部幅15cm以下(5cm以上)、柄の角度は60～90°とされる(ドットで示した領域)。しかし引き鍬(土壌の削平・移動用の鍬)については、刃部幅15cm以上(25cm以下)という点ではほぼ一致するが、柄の角度は民具学の分野では40～45°(飯沼・堀尾1976など)と非常に鋭角なのに対し、出土遺物からみた根木修の研究では45～75°とかなり広めに設定されている。本稿では一応、根木の説にしたがい、引き鍬の領域を、打引き鍬(両者の中間的な鍬)込みの範囲として斜線で示した。それによると、図13では、全体のおよそ3分の1が打ち鍬・引き鍬(打引き鍬)のいずれにも該当しない範囲に属することになる。直柄小型鍬はすべて狭鍬でなおかつ打ち鍬の領域に属する(グレーの枠内)。しかし、小型鍬は身部の長さが短いため、地面に深く打ち込み、土を反転させるという打ち鍬本来の機能はない。つまり、この時期には、刃部幅と柄の装着角度に明確な相関関係が存在しなかった可能性が高い。ただし固有の平面形をもつ直柄小型鍬(31～34)と、身の側縁に刃がつく平鍬I(2)・IV類(8・12・13・17・18・23)に関しては、他の直柄平鍬とは異なる機能を有していたとおもわれる。

### (3) 東三河・西遠江の直柄鍬(弥生III～IV期)

東三河および西遠江では、広鍬に分類されるものが伊勢・濃尾平野より多くなり、広鍬側の

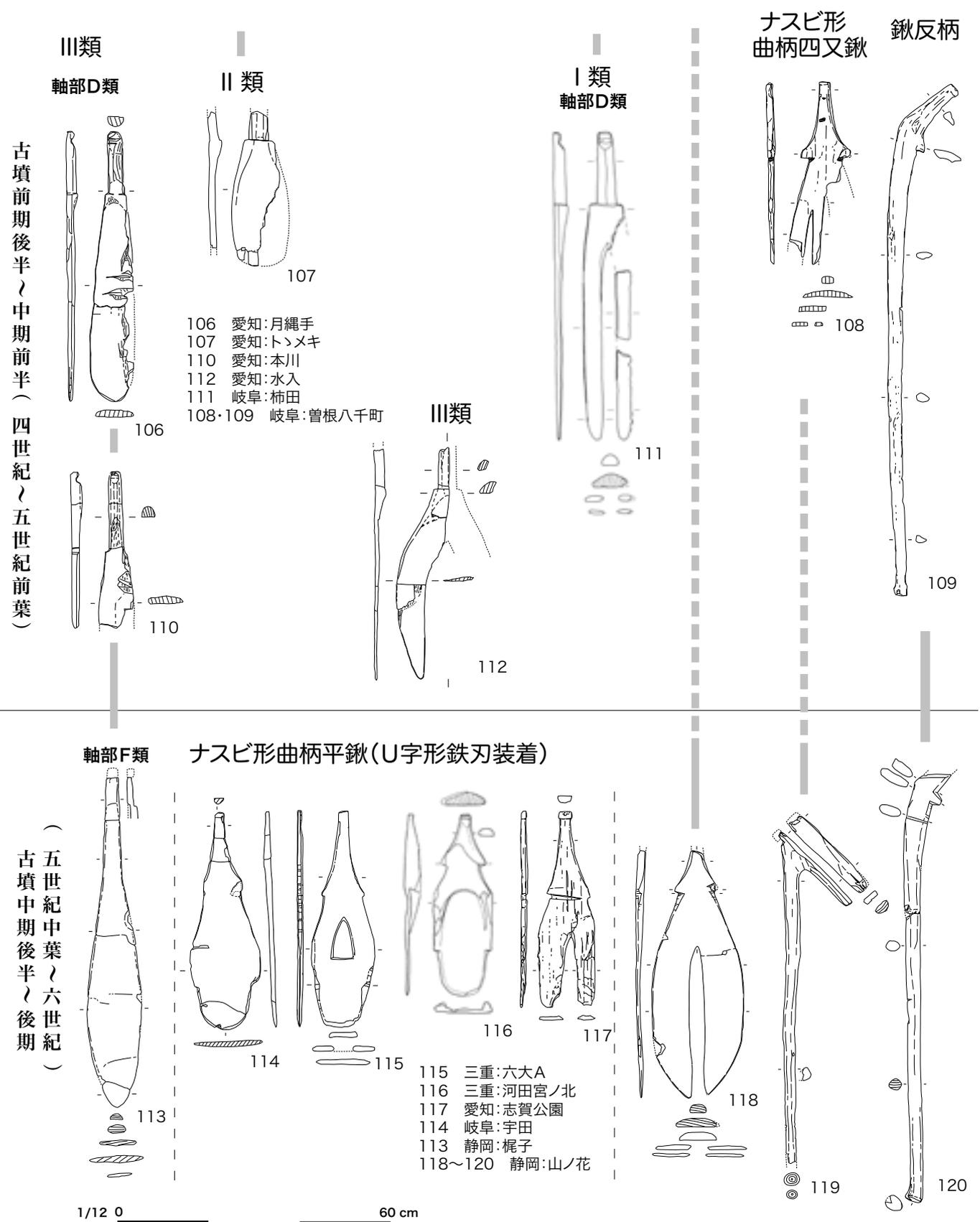


図9 曲柄鍬編年表-4

刃部幅はより広くなる傾向が認められる(図14)。しかし、やはり全体的には刃部幅・柄の装着角度は著しくバラついており、打ち鋤・引き鋤(打引き鋤)の領域を重ねても、両者に属さないものが3分の1を超えている。小型鋤は伊勢・濃尾平野と同様に打ち鋤の領域に収まるが、前述のように打ち鋤としての機能はなかったと考えている。

ここまでみてきた2地域について、直柄平鋤完成品の領域に、先に検討した弥生IV期の曲柄平鋤の領域(黒の太枠内)を重ねると、直柄平鋤(小型鋤)の大半が曲柄平鋤と重複することになる。以上のことから、弥生I~V期を通じて、当地域の直柄平鋤と曲柄平鋤の間には、明確な機能分化は存在しなかったと考えられる。

#### (4) 古墳初頭~中期の直柄鋤

最後に、古墳時代の直柄鋤を検討する(図15)。直柄平鋤は、37・51を除いてすべて広鋤の領域に属する。37は平鋤IV類で、この時期としては希少例であり、51は先に検討したように平鋤VIII a類からの再加工品である可能性が高いことから、この時期の直柄平鋤は刃部幅の点でかなり規格性が高いことがわかる。また、柄の装着角度も51以外は60.5~86.7°と弥生I~V期の直柄平鋤よりもはるかにまとまっている。

曲柄平鋤は、刃部幅が5.6~17.5cm、柄の装着角度は39.7~72.5°と、ほとんど直柄平鋤とは重ならない領域にシフトしている。

以上の点から、古墳初頭以降に関しては、直柄平鋤のほとんどを広鋤とよぶことができ、かつ曲柄平鋤との間にも明確な機能分化が認められる。これに打ち鋤・引き鋤(打引き鋤)の領域を重ねると、直柄平鋤はかろうじて引き鋤(打引き鋤)の領域に重なってくるのに対し、曲柄平鋤はいずれの領域にも属さない。それぞれの鋤の形態からその機能を想定すると、まず直柄平鋤VIII(a・b)類にはすべて泥除け具を装着するための細工がほどこされている。黒崎によると泥除け具装着の鋤は、「激しく打ち下ろして土を耕起する作業には不向きで、土を反転し砕きながら引き均す作業に適した鋤」(黒崎1996)であることから、直柄平鋤VIII類は

引き鋤ないしは打引き鋤の機能が相応しい。ただ近世の鋤から類推される引き鋤(装着角度が40~45°)に較べると、はるかに柄の装着角度は緩やかである。一方、曲柄平鋤については、刃部幅の点では打ち鋤に相当するが、柄の角度で打ち鋤の領域と重なる部分は少なく、むしろ引き鋤(打引き鋤)の領域にふくまれる。

直柄横鋤に関しては、刃部幅が25cm以下のものと30cmを超えるものに大きく分けることができる。柄の装着角度は50~69°と比較的狭い範囲に集中し、しかもそのほとんどに泥除け具を装着することから、ほぼ引き鋤としての機能に限定できる。

直柄払い鋤については、直柄平鋤(横鋤)・曲柄平鋤とも全くかけ離れた領域をもち、その独特の形状からも、他とは異なる特殊な機能を有していたことがわかる。

## 6 まとめ

前章では、伊勢湾周辺地域の鋤について、刃部幅と柄の装着角度からその機能の類推をおこなった。その結果、弥生I~V期には、直柄平鋤のうち、身の側縁に刃部を有するI・IV類や直柄小型鋤以外は、広鋤・狭鋤という従来の分類基準も不明確で、曲柄平鋤との間にも明確な機能分化を認めることができなかった。

一定の規格性をもち、泥除け具を装着する直柄平鋤VIII類が出現する古墳初頭にいたって、ようやく広鋤へのシフトが明確になり、曲柄平鋤との間にも機能差が認められるようになる。さらにこの時期、引き鋤として直柄横鋤、除草用?の直柄払い鋤が登場し、鋤の機能分化がいつそう明瞭になる。しかし、この段階でもなお、すべての鋤に対して打ち鋤・引き鋤・打引き鋤という民具学的分類が完全に適合するわけではない。とすれば、弥生~古墳時代の鋤にみる法量差には、民具学的な機能差では割りきれない、異なる原理が働いていたと考えられる。

弥生時代の鋤に関しては、沖積地にある多くの遺跡から製作途上の未成品が出土することため、基本的にどの集落でも製作されていた。製作者も専門工人とよばれる特殊な技術者ではなく、一般成員が農閑期などに製作していたとお

図9 曲柄平鎌の刃部幅分布グラフ(伊賀～西遠江:弥生IV～古代)

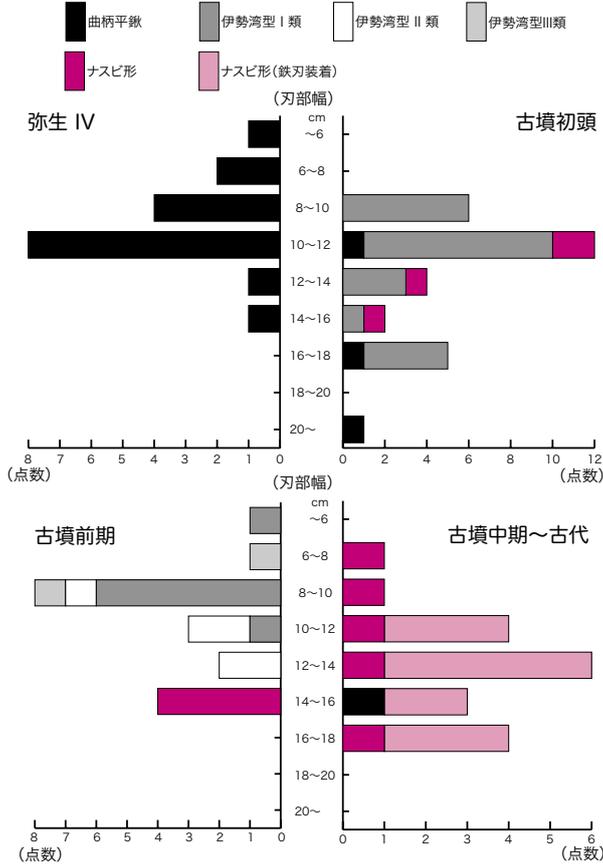
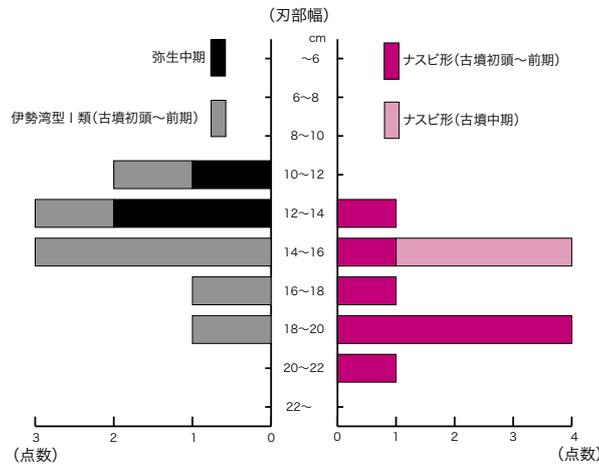


図10 曲柄二又鎌の刃部幅分布グラフ(伊賀～西遠江:弥生III～古墳中期)



cf.1 近畿地方から出土した曲柄平鎌の刃部幅 (上原真人1993『木器集成図録』より)

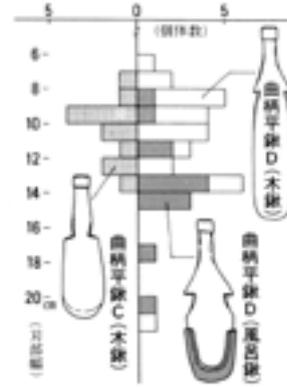
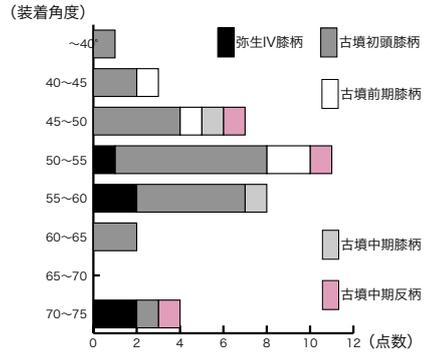


図11 膝柄・反柄の装着角度分布グラフ (伊勢～西遠江:弥生IV～古墳中期)



cf.2 近畿地方から出土した曲柄二又鎌の刃部幅 (上原真人1993『木器集成図録』より)

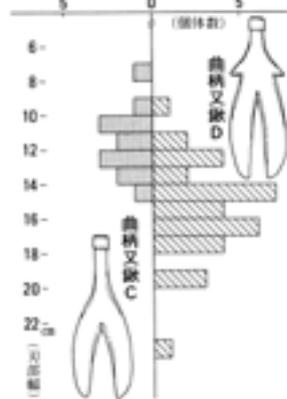
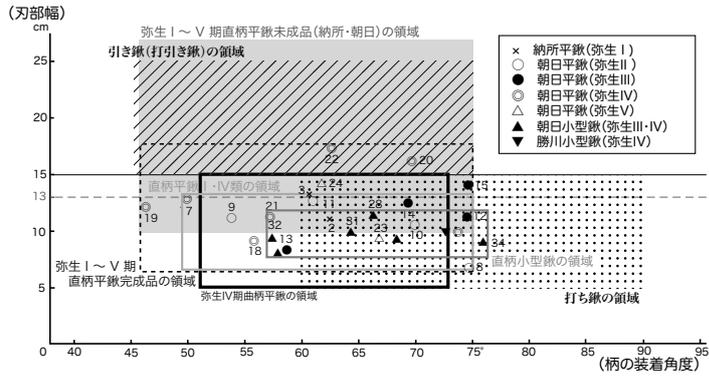


図13 直柄平鍔・小型鍔の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ  
(伊勢・濃尾平野:弥生I～V期)



cf.3 近畿地方出土の直柄平鍔・横鍔の刃部幅  
(上原真人1993『木器集成図録』より)

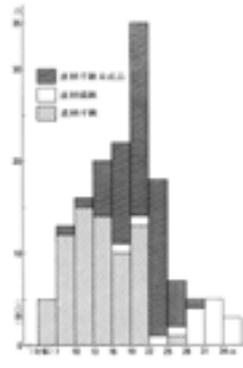


図14 直柄平鍔・小型鍔の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ  
(東三河・西遠江:弥生III～IV期)

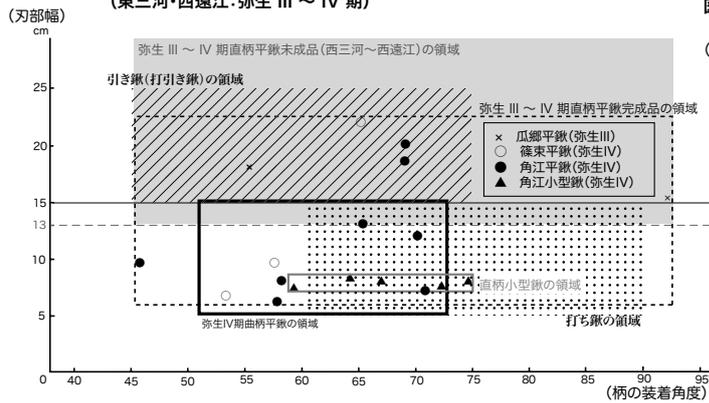


図12 直柄平鍔・横鍔未成品の刃部幅分布グラフ  
(伊勢～西遠江:弥生I期～古墳中期)

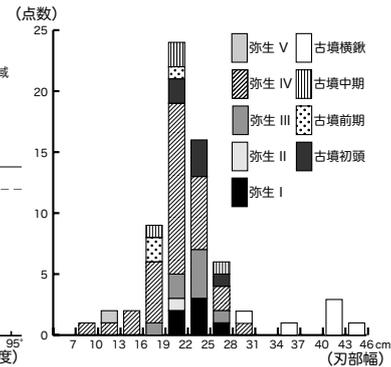
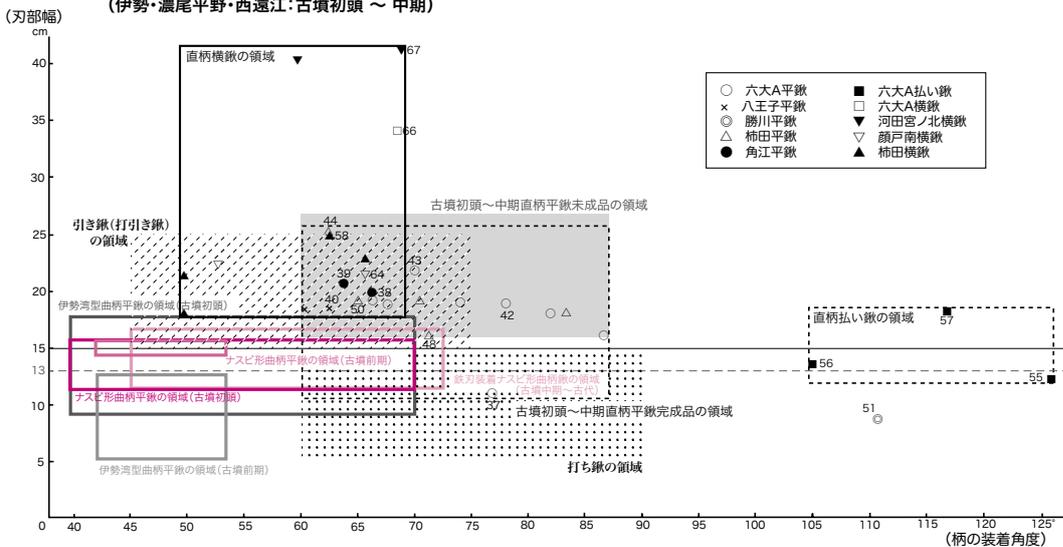


図15 直柄平鍔・横鍔・払い鍔の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ  
(伊勢・濃尾平野・西遠江:古墳初頭～中期)



もわれる（樋上2005）。とすれば、この時期は鎌の製作者と使用者が、同一ないしは互いの顔がみえるようなきわめて近い関係にあったといえる。すなわち、刃部幅や柄の装着角度にみる著しいバラつきは、柄の長さもふくめて使用者の身体的特徴や作業姿勢などの違い（好み）を反映していた可能性がある。

さらに、西三河以東の直柄平鎌に較べて、濃尾平野（朝日遺跡）の刃部幅が総じて狭いことについては、鎌を作るためにその集落で調達できる原材の太さの差を反映している可能性も考えられる（樋上2002）。

古墳初頭（弥生終末期）以降、直柄平鎌未成品（特に連続成形品）は沖積地の集落から姿を消し、山間部や丘陵（洪積台地）の縁辺部に立地する集落からしか出土しなくなる。この時期から、鎌の原材となるアカガシ亜属の大径材（直径70cm以上）が確保できる集落に鎌の製作地が限定され、木材資源に乏しい沖積地の集落は完成品（あるいは半完成品）の供給をうけるのみとなる（穂積2000・樋上2005）。直柄平鎌の規格化が著しく進行し、未成品と完成品の領域がほとんど重なるのは、このためであろう。ただし、柄の装着角度は未だ若干のバラつきがあることから、着柄のみは使用者側でおこなわれていたとおもわれる。

この時期の鎌が、生産地と消費地の間で、どのようなかたちで取引されていたのかは不明である。しかし規格化の進行は、すでに商品と

しての鎌の第一歩を踏み出している可能性がある。その傾向がよりいっそう明確になるのは、直柄風呂鎌（図4-53）の出現以降と筆者は考えている。この段階をもって、弥生I期（あるいは縄紋晩期）以来続いた直柄平鎌の伝統が途絶え、かつ古墳前半期には隆盛をきわめたナスビ形（および伊勢湾型）曲柄鎌も終息にむかっていくという点で、この直柄風呂鎌の成立は非常に大きな意味をもっている。近世の農書や民具学の研究から復原される「打ち鎌・引き鎌・打引き鎌」という機能分化の、本当の意味での出発点も、この直柄風呂鎌が登場して以降のことだとおもわれる。ただ、この古墳後期～中世の直柄風呂鎌はいまだ全国的にも数えるほどしか出土していない（山田1998）。今後、これらの資料が増加し、本稿で示したような分析をおこなうことができれば、民具学からも追える近世の鎌への道筋がみえてくるのではなからうか。

#### 謝辞

本稿は、2005年3月におこなわれた唐古・鍵遺跡共同研究における口頭発表を骨子としている。今回文章を作成するにあたり、つぎの方々より貴重なご教示を得たことを記します。

植田信太郎・金原正明・寺澤 薫・外山秀一・福田栄治・藤田三郎・穂積裕昌・山田昌久（敬称略、50音順）

#### 参考文献

- 飯沼二郎・堀尾尚志 1976 『農具』ものと人間の文化史 19 法政大学出版局。  
 上原真人 1993 『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所史料第36冊。  
 黒崎 直 1970 「木製農具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会。  
 黒崎 直 1996 『古代の農具』日本の美術 No.357 至文堂。  
 根木 修 1976 「木製農具の意義」『考古学研究』第22巻第4号 考古学研究会。  
 樋上 昇 1989 「木製農具の地域色とその変遷—勝川遺跡出土資料を中心として—」『年報 昭和63年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター。  
 樋上 昇 1993 「木製農具研究の一視点—ナスビ形農具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』3。  
 樋上 昇 2000a 「東海系曲柄鎌再論」『考古学フォーラム』12。  
 樋上 昇 2000b 「3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鎌の波及と展開—」『日本考古学』第10号 日本考古学協会。  
 樋上 昇 2002 「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム』15。  
 樋上 昇 2005 「木製品専業工人の出現と展開—伊勢湾周辺地域における木製品の生産と流通をめぐって—（上・下）」『古代学研究会』168・169号 古代学研究会。  
 穂積裕昌 2000 「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について～三重県内の木器出土遺跡からの素描～」『研究紀要』第9号 三重県埋蔵文化財センター。  
 宮本常一 1979 『民具学の提唱』未来社。  
 山田昌久 1998 「風呂鎌の成立と展開」『人類誌集報1998』東京都立大学考古学報告3。  
 山田昌久 2003 『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館。